

〈研究ノート〉

北京の都城構造における中軸線の歴史地理的考察

張 立 宇

I. はじめに

近年、北京市が北京の中軸線及び関連建築群を世界遺産の国内リストに加えさせようとする努力を中国政府が続けていることが話題になっている。周知のように、北京の中軸線上に位置する紫禁城および中軸線南端と隣接する天壇は、すでに世界遺産として 1998 年に登録されている。それにもかかわらず、北京の中軸線そのものを世界遺産に登録しようと中国政府が画策している理由は、中華系都城の最終形態として、北京における中軸線を中国における都城計画の集大成として位置づけようとする意図からである。

都市中軸線の理念は中国特有の計画思想ではなく、もっと古い時期の古代アッシリア、バビロン、エジプトから、ヨーロッパ、アラビア、インドなど各地の都市計画において、同様の計画思想が含まれている。ところが、都市全体を貫通し、全都市の対称軸となる中華系都城の中軸線計画は、全世界の都市計画史から見れば、非常に珍しいケースである⁽¹⁾。北京周辺に、本格的な都城が置かれたのは 12 世紀の金中都時代である。しかし、現代の北京における都市中軸線が直接継承しているのは、明清時代の北京の中軸線である。その起源を遡ると、元の大都の中軸線の一部である。

現在の中軸線は北端の鐘楼を起点とし、鼓楼、火神廟、万寧橋、普度寺、景山、紫禁城、天安門広場、人民英雄記念碑、毛沢東記念堂、正陽門などを貫通し、南端の永定門まで約 7.8 km の南北の線である。

歴史上存在した数多くの中華系都城の方向ないし中軸線の方向は一般に正南北方向で設計されたが、北京の中軸線は反時計回りの約 2.1 度 (N 2.1° W) の偏りがある。この中軸線の偏りが本格的に注目されたのは、2004 年であった⁽²⁾。そこから、中国の学界では北京における中軸線の偏りの原因をめぐる推測や論争がさかんになったが、いずれも定説とはなっていない。

また、清代には多くの精密な都城の地図が作成されたが、時代や作者によって図面における中軸線の描き方は大いに異なる。特に中軸線の偏りに関しては、さまざまに表現されている。そこから、当時の中華系都城の計画における方向や方位の思想もうかがうことができると筆者は考えている。

一方、西洋の建築史や都市計画史における都市の広場及び軸線の研究が多いのに対して、中華系都城における中軸線の専門研究はこれまであまりない。積山の研究⁽³⁾は、夏（紀元前 18–16 世紀）の二里头遺跡からの中華系都城の中軸線思想の変容と継承を詳しく考察している。ただし北京のような隋唐時代に興起した都城にまったくふれていない。北京の中軸線に関わる諸問題の解

決は世界遺産登録にとっても無視できない課題である。近年の北京の中軸線に関する先行研究として、北京の中軸線を復元し、各時代の変遷に注目したのは郭（2012）の研究しかない。本稿は北京を対象に、その中軸線の都城計画における意義や中軸線の偏りなど諸問題を、先行研究を踏まえて、各時代の北京図を用いてあらためて再検討し、その謎の一端を解明することを目的とする。

Ⅱ. 北京における中軸線の意義

（1）中華系都城における中軸線の思想

都城を計画的に区画するためには、何本かの境界線が必要である。そして各境界線の交叉によって生まれるブロックはそれぞれ特有の機能を持っている。都城においては、最も大きな機能区画線は中軸線である。中華系都城の中軸線は一般的に東西ではなく、南北の方向をとるのが原則である。都心部を貫通して、東西あるいは左右二大区域が区画される。祭祀や役所は種別によって、中軸線の左右に分布する。中国における都城計画の基本としては、『周礼』「考工記」⁽⁴⁾で次のように述べられている。

匠人営国。方九里，旁三門。國中九經九緯，經途九軌。左祖右社，面朝後市，市朝一夫⁽⁵⁾。

（匠人は国を営む。方九里，旁三門。国中に九經九緯あり。經途は九軌。祖を左とし，社を右とす。朝に面し市を後とす。市朝は一夫。）

『周礼』の成立ははっきりしないが、先秦時代に一つの理想的な都城形態モデルが存在したことは確かであり、儒教の經典の記載として、後世においても重視されていた。しかし上述の文献に完全に従う都城の例は存在しない。史料の中では直接に中軸線にふれていないが、「左祖右社」とする以上、中軸線を意識しているといえる。祖は祖先を祭る「祖廟」、「太廟」などをさし、社は土地の神と五穀の神を祭る社稷壇を示す。左と右は天子が南面することを前提とし、左は東、右は西を意味している⁽⁶⁾。つまり、中軸線の東側に祖先を祭る空間が、中軸線の西側には土地神と五穀神を祭る空間が存在する。

明清時代の北京城は「左祖右社」の典型的例である。図1に示すように、北京の中軸線により、異なる機能を持つ祭祀空間が区切られて、対称を保っている。他にも中軸線を基準にして、東に祖先を祭る空間、西に土地の神と五穀の神を祭る空間を置く都城が少なくない。

一方、「面朝後市」を実現した都城は多くない。「面朝後市」とは、前（南）に朝廷や朝堂を置き、後（北）に市場

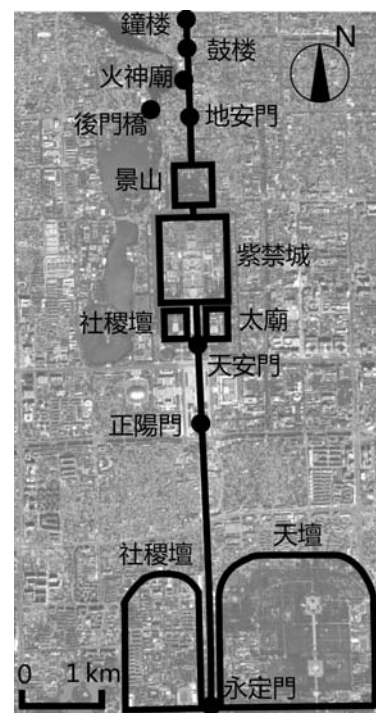


図1 北京中軸線の立地
（Goole earth 衛星写真を基図に筆者作図）

を置くことである。例えば、北京の場合は、朝廷の北側の鼓楼一帯に商業が発達していたが⁽⁷⁾、隋唐長安城のような都城では、朝廷がすでに都城の北端に位置することもあり⁽⁸⁾、「面朝後市」を実現することはできない。言い換えれば、「左祖右社」と比べると、「面朝後市」だけが実現された都城の例はたいへん少ないのである。「左祖右社」の両空間を分ける中軸線が存在するのに対して、東西を走る中軸線が存在しないため、「朝」と「市」の場所を『考工記』のとおりに確定できない。これを一般的にみれば、中軸線としては東西と南北の二軸を持つよりも、南北の一軸が意味をもっていたといえる。また、「文東武西⁽⁹⁾」の東西対称空間も中軸線を中心にして確定される。

それでは、なぜ中軸線は南北を走るケースしかないのだろうか。その答えは、中華系都城の中軸線設計思想のなかに隠されている。この思想にもとづいて最初に建てられたのは秦の咸陽とされる。それまでの都城の立地確定や設計手法は、占トか地表に立てた軸の投影方位で判断した。秦以降は、先秦時代の「定之方中，作於楚宮」⁽¹⁰⁾の思想に従わず、地の理と天の象⁽¹¹⁾によって、都城の立地を選定した。

天象では、北極星の思想がとりわけ重要である。古代中国人は、北極星は地球の自転軸の方向に存在することを知らず、永遠に不動で各星宿ないし宇宙の中心として意識していた。また、北極星を「気」が最も集中する所、天帝が住む最も尊い星とした。したがって、地上の一つの建造物を北極星の象徴とし、この建造物を貫通する軸を、北極星を貫通する天の軸につながるものと想定していた。この軸に基づいて造営した都城は、天下の中心に位置すると秦の始皇帝は確信していた⁽¹²⁾。また、中軸線には、王権が象徴される建築が集中することに加えて、中央にメインストリートが設計されている。これは古代の地域計画に関わる問題であるが、本稿ではこれ以上は贅言を弄しない。

(2) 北京中軸線の始原——元の大都

現在の広義の北京中軸線とは、北京市の地理的中心を貫通する北のオリンピック公園から、南の南苑までの道路と景観群をさす。オリンピック緑地、天安門広場、中軸線両側の天壇や先農壇なども含み、「両軸両帯多中心」⁽¹³⁾と呼ばれる北京の現代都市計画の南北軸となっている。

一方、歴史的な狭義の北京中軸線は、北の鐘楼から南の永定門までの道路及び歴史建造物をさす。本稿で考察するのは後者である。現在の北京における中軸線がは明清時代の北京中軸線を継承している。しかし北京における王都の中軸線の創始は元の時代⁽¹⁴⁾であった。

元代の北京中軸線を検討すると、中心台という建造物を重視しなければならない。侯仁之が編集した『北京歴史地図集』の元大都の復元図のように、中心台は元大都の地理的中心であり、中軸線の起点でもある。元の大都に関する最も古い史料である『析津志』（熊夢祥『析津志輯佚』）には

中心台、在中心閣西十五歩。其台方幅一畝，以牆繚繞。正南有石碑，刻曰：中心之台，寔都中東，南，西，北四方之中也。在原廟之前。

（中心台は中心閣の西十五歩に在り。其台，方幅一畝，牆を以って繚繞さる。正南に石碑有

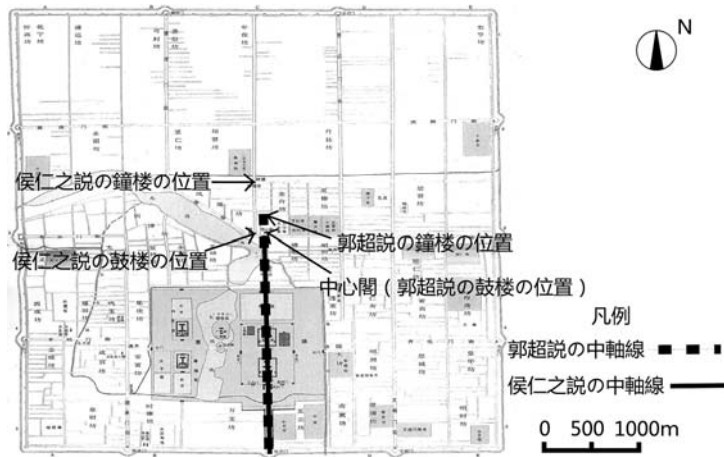


図2 元代の北京中軸線
(侯仁之「元大都復元図」に筆者加筆)

り。刻して曰く、中心の台、寔に都中の東、南、西、北、四方の中なり。原廟の前にあり。)

と記されている。

史料に記載されているように、中心台はかつて元大都の地理的中心であった。したがって、元の大都の中軸線が中心台を貫通するのはごく自然である。しかし、中心台の位置は現時点では正確に比定されていない。そのため、元の中軸線の起点がどこにあるかは確実ではない。中心台だけではなく、元の大都の鐘樓と鼓樓も中軸線の起点にとって鍵になる。元の大都の鐘樓と鼓樓の位置については、侯仁之説と最近の郭超説がある。侯仁之説は復元図のとおり、元代の鐘樓と鼓樓は旧鼓樓大街、つまり現在の中軸線の西に平行する道路に位置づけているとすれば、中心台の位置は現在の鼓樓に相当する。中心台以北には平行するもう一本の中軸線があると理解できるが、その線は宮殿を貫通しなかったため、中軸線は北の中心台から南の麗正門までになる。この説は現在広く中国の学界に認められている。

郭超の説によると、元代鐘樓と鼓樓の位置は、現在の鐘樓と鼓樓（明清時代の鐘樓と鼓樓）と同じ直線上にあった。郭は金の太寧宮の場所や隋臨朔宮の存在を論拠とし、中軸線は隋臨朔宮、金太寧宮、元大都の順で縦承されてきたと主張している⁽¹⁵⁾。

もし郭説の推定が正しければ、北京中軸線の歴史を隋にまで遡ることができるかもしれない。しかし、筆者は郭説は成立しがたいと考えている。隋臨朔宮、金太寧宮自体は都城ではない。都城ではない宮殿建築群の中軸線を後の都城が継承するというのは単なる形式論に過ぎない。また、隋臨朔宮の遺址はまだ確定できないため、隋から継承した中軸線という説は現時点では成立しえない。また、中心閣の所在地である万寧寺にかかわる史料や考古学の成果は多くないので、『析津志』の現存部分⁽¹⁶⁾からみれば、侯説が今のところ最も有力な説と考えられる。

Ⅲ. 中軸線の偏りと上都指向説

(1) 北京中軸線の偏り原因の諸説

2004 年、中国測量製図科学研究院の研究員夔中羽が北京の中軸線の空中写真を撮影するための飛行ルートを計画した時、北京の中軸線が歪んでいることが気付いた。夔が北京の空中写真や衛星写真と現代北京地図を対照しながら検証した結果、北京の中軸線ないし二環路⁽¹⁷⁾以内の街路すべてが時計回りの方向への偏りを持っていた。彼が現代北京の地図出版部門と連絡をとると、担当者は「20 世紀 50 年代の北京市の都市計画部門による実地測量で中軸線や北京都心部の偏りがすでに分かっていた⁽¹⁸⁾。偏りの角度が小さくて、一般市民が発見し難いため、公表しなかった。」と回答した。

夔は中軸線の偏りを再検証するため、北京中軸線南端の永定門、北端の鐘楼と鐘楼南部の永定門を基準点とし、再測量が行なわれた。永定門から真北方向に子午線を引くと、地安門からこの子午線までの垂直線分の長さは約 200 m で、鐘楼からこの子午線までの垂直線分の長さは約 300 m であることが判明した。計算してみると、北京の中軸線は反時計回りの方向へ 2.1 度偏っていた。

中国の歴代都城には正東西南北の方向をもつ例が多い。言い換えれば、都城の主要街路の方向、また東西南北にある城壁の向きは、経線または子午線の垂直線と平行する。それ以外の例も少なくないが、それは、周囲の山脈や水系に影響をうけて、方格状の都市を適当に変形し、また立地にあうため一定の角度を回転せざるをえない場合である⁽¹⁹⁾。

そのような地形条件の影響を受けておらず、中軸線が一定の方向へ若干の偏りを持つ都城の例が、成都⁽²⁰⁾と北京である。北京は中国においては最末期の帝都であり、周礼型都城計画が復活したとされる都城でもある。そのため、その街路や軸線は正東西南北方向に従うことは容易に意識される。それにもかかわらず 2.1 度の偏りを持つのはいったいなぜなのだろうか。この謎は近年北京の歴史と地理のホットな話題となっている。いくつの説がこれまで現われてきたが、未だに定説がない。現在みられる主な説は次のとおりである。

a 民族矛盾により故意に歪めて設計したとする説

元によって中原が統一された背景としては、漢人をはじめとするモンゴル人以外の諸族は、元に対する敵意や不服などをもつ。漢人である劉秉忠は大都の設計者として、フビライの王座を故意に歪ませるため、発見されない範囲で大都の全体計画を 2.1 度に回転したというのがこの説である。この説を提唱する人物は明確ではない⁽²¹⁾が、北京城の偏り問題を検討する際にはよく出てくる。それにもかかわらず、学術的な意味をもつ学説としては、ほとんど認められていない。

b 上都指向説

夔中羽は北京の中軸線の偏りを測量・計算する際、元の大都に遷都する以前の都である上都の存在に注目している。北京の中軸線を北西に延長して、北京と 270 km も離れたフビライの夏宮である元の上都の一带につながることを発見した。その後、夔は、北京の中軸線は元の上都の所

在方位を狙ってわざわざ偏りを意識して設計されたとする「上都指向説」を提出した。2005 年、劉海沈は雑誌『走近科学』第 2 号で、北京中軸線の上都指向説をめぐって論じている。同じ年には、さまざまな学術雑誌や一般雑誌⁽²²⁾には、北京の中軸線の偏りの再発見と夔中羽の上都指向説が掲載されている。北京の中軸線は上都を指すと夔は確信している。

c 測量技術と磁気偏角説

張耀南によると、元の時代まで、二つの方位測定の方法しかなかった。それは、宇宙の天体を観測して、天文の子午線を測定する方法と、磁石を利用して地球磁場の子午線を測定する方法である。当時の技術水準では、正確に磁気偏角を測量するわけにはいかない。夔中羽が述べた北京中軸線の偏りは当時の磁気偏角であると張は主張している⁽²³⁾。

(2) 既存の説への疑義

以上紹介したようにいくつかの説があるのだが、現在最も有力な説は、おそらく上都指向説と考えられる。しかし、筆者はいずれの説に対しても疑義をいただいている。

まずは、民族矛盾により故意に歪めて設計したとする説。『元史』⁽²⁴⁾によれば、劉秉忠はフビライカンのお気に入りの大臣であった。そこから、劉秉忠は漢人といえども、才能や忠誠心両方とも備えていることが分かる。また、大都の直前の都城である上都の設計者も劉秉忠であった。上都の中軸線や都城全体の方向は正東西南北なので、民族矛盾により故意に歪めて設計したとする説の信憑性は低い。

次にあげたのは測量技術と磁気偏角説である。中国人は唐の時代から、正確に磁気偏角を測ることができた⁽²⁵⁾。したがって、高度な測量技術を有する劉秉忠が磁気偏角を無視することはあり得ない。また、千年の都と呼ばれる平安京の中軸線や街路の方向は、すべて正南北方位である。平安京より約 500 年後に築かれた元の大都の測量や造営技術が、平安京に劣らないことは当然である。それにもまして、上都と大都の竣工は同時期であるので、もし磁気偏角の影響を受けたら、上都の中軸線街路の方向も偏りを持っているはずである。こうみれば、測量技術と磁気偏角説は成立しないことが分かる。

最後に、歴史地理学的に最も興味深い上都を指向したとする説について、筆者の疑問を述べてみたい。鐘楼から永定門までの線を鐘楼方向へ偏らず延長し、元上都の緯度に相当する場所に移してみると、元上都の構内におけるいずれの地域にも到達できない。その延長線が到達する場所が図 3 が示した双山水庫付近である。さらに、北京から引いた延長線上、元上都の宮城の幾何中心点と緯度が同じ場所を選定し、この点から元上都の宮城の幾何中心点までの距離を測ってみると、7 km 余り離れていることが明らかになった。元代とはいえ 7 km の距離は誤差の範囲とするには無理である。先述したように元の都城設計者の劉秉忠、郭守敬の測量技術は非常に高度なものであり、誤差が生じることは考えられない。したがって、北京中軸線の上都指向説は有効な説とはいえない。

(3) 中軸線偏り要因の推測

天興3(1234)年、金はモンゴルに滅ぼされ、憲宗6(1256)年フビライは劉秉忠を命じて灤水⁽²⁶⁾の北に城郭を造って、開平府と命名した。中統元(1260)年フビライが開平で即位すると、中統5(1264)年上都に改称した。中原に君臨し、長城以南の地域で都城を設置する必要があるため、至元4(1267)年には金の中都の東北に新たな都城を造営し、至元9(1274)年大都と命名した。この時期以降、上都は夏に避暑や政務をとる副都として存在することになる。

遷都の要因は上述の事柄以外には、人口の増加も考えられる。風水の要素も考えれば、劉秉忠が旧金中都の位置する北京平原で建都することは必然といえる。フビライが即位した上都の中軸線を前章で述べた天の軸として、新しい都城の中軸線がその軸をそのまま継承すれば、最も理想的な状態となる。遊牧民族のモンゴル人が、都城を建設する際、草原にある湖沼に含む水系をかなり重視することは容易に推測できる。

筆者の推定では、上都の中軸線(宮城を貫通する軸線)を傾かせずに南下させると、北京平原の永定河流域の水量が最も豊富な地帯にたどり着く(図3、4参照)。しかし、永定河の治水は清

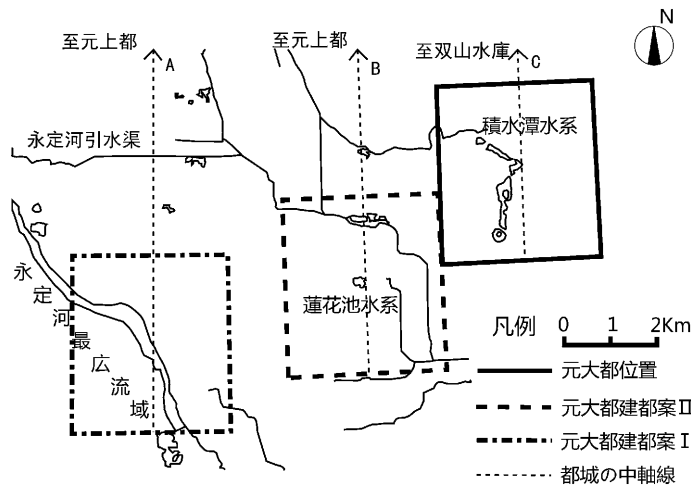


図3 元大都立地選択の推測
(筆者作図)

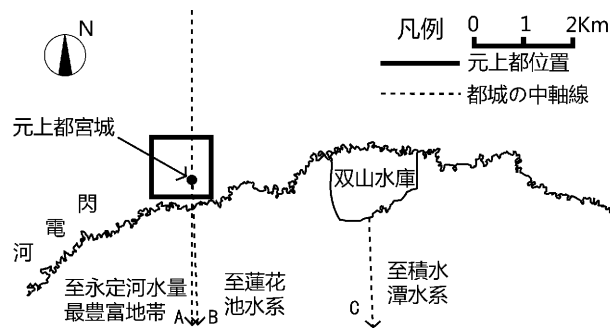


図4 元上都付近における元大都建都案の中軸線の延長線
(筆者作図)

の時代まで、解決が困難であったので、元代にそこに都城を建てる案は実現できなかったと推測できる。

第二の案は、金中都が使用していた水路である蓮花池水系を都城の地理的中心として、新しい都を造営したとする案である。金の中都の立地はいうまでもなく勝手に選んだのではない。王氣⁽²⁷⁾が最も強いところを選んだ。後に完成した元大都のように、水系を都城の中心部に置き、同じ規模の都城を建設した案が存在したことは確実である。なぜなら、元の上都の中心部から筆者が述べている第二の案の都城まで線を引いてみると、その線の角度は後の各時代の北京の中軸線ないし北京城の偏りの角度と同じだからである。つまり、第二の案は上都を指していると言えるだろう。

第二の案を破棄したのは、「滅亡した前王朝の故都を使用するのは、ふつう不吉と考えられる」⁽²⁸⁾と杉山が大都新造の理由の一つとして指摘している。その最も重要な理由は、蓮華池水系の水量は、大都の住民に水を供給するには十分でないことを考慮して、積水潭水系の周辺に決めたのではないだろうか。既に精密な設計図が完成し、角度も含め、勝手に修正できず、そのまま積水潭を中心とする地域で建都したと思われる。

要するに大都の中軸線は直接に上都に指すのではなく、一つ前の建都の案で計画した都市の中軸線が上都を指向していたと解釈される。

IV. 歴史地図で描かれた中軸線

(1) 清代の北京図

清の時代は最初の北京での地図の作製ブームと言える。それ以前、発行された北京地図の量も質もいずれも清代とは比べものにならない。さらに、現存の北京の歴史地図から見れば、清以前の地図はなかなか見つからないので、清の地図を例として、図面から描かれた北京の中軸線を検討してみたい。清の時代の北京地図は数が多いため、典型的ないくつかの図を検討する。

乾隆 15 (1750) 年の「乾隆京城全図」⁽²⁹⁾は、精密さでは匹敵する中国の都市地図がない。作製から時間を経ているので、紙質の変化や使用による消耗などにより、鮮明さを欠くところが多少ある。とくに中軸線の部分は恰も折り目と重なり、地図の展開や収納によってかなり損耗され、建築物と街路にかかわる部分は見づらいところが少なくない。ところが、折り目が中軸線と重ねることにこそ、一つの重要情報を読むことができる。それは、「乾隆京城全図」で描かれた中軸線の偏りが表現されなかったことである。中軸線だけではなく、東西あるいは南北走向の街路や胡同にほとんど傾きがなく、正南北として描いていることが一目瞭然である。また、ネット上のデジタル地図である Google 画像を利用して、衛星写真のレイヤの上に「乾隆京城全図」のレイヤをのせて観察すると、二枚の地図を完全にそろえるためには、縮尺の調整のほか、「乾隆京城全図」を全体反時計まわりの方向へ 2.1 度を旋回せざるをえないことがわかる。図面ではもちろん北の方位表示もないが、中軸線は明確に正南北の方向に描かれている。西洋の製図法に精通するカスティリオーネ⁽³⁰⁾が監修を担当していたため、方位や角度に気付かなかったとは考えられ

ない。この「乾隆京城全図」では、北京城全体の角度偏差はどのように認識されていたのだろうか。

光緒 16 (1890) 年～光緒 27 (1901) 年の間に作成されたとされる「京城内外首善全図」⁽³¹⁾は伝統的な製図方法で描かれた北京地図であり、各街路や建造物の名称が詳細に記載されている。中軸線や北京全城の方向は時計まわりに若干の角度で回転されている。言い換えれば、この図で描いた中軸線の偏りの方向は現実の方向と反対になっている。

光緒 27 (1901) 年前後完成した「京城詳細地図」⁽³²⁾は清代末期における詳細な北京地図である。方位は示されていないが、図面にある図の題名と説明文の方向と合わせて見ると、北京の中軸線ないし多くの街路はまた正南北の走向に描かれたことが分かる。

上述のとおり、清代に描かれた多くの北京の地図では、中軸線に対する描写は千差万別である。ところが、中軸線の偏りを忠実に表現したり、注意した形跡のある地図は見られない。

(2) 北京図で描かれた中軸線

周知のように清代以降の中国都市地図はほとんどが伝統的製図法ではなく、近代的製図法で作成されている。それにもかかわらず、北京の中軸線及び街路の描き方は異なっている。近代以降、中国国内、海外各機関、個人によって作成された北京図は数多く存在するので、各時期の代表的な地図を例として年代順に検討してみよう。

20 世紀初頭から昭和 20 年代まで、日本の陸地測量部（参謀本部）が測量、製版した 2 万分の一の北京の地形図⁽³³⁾においては、北京内城の都市構造も含めて、街路及び中軸線の方向はすべて正確に描かれている。

「近代中国都市図集成」⁽³⁴⁾（柏書房）に収められた 1927 年の北京図は 1 万分の 1 の縮尺で、原図は北支那方面軍司令部『保管地図目録』に所蔵されている。この北京地図の縮尺は近代の北京図の中においても大縮尺といえる。これには北の方位がはっきり明記されている。だが、このような精密地図で、北京の中軸線や街路の方向は正南北である。言い換えれば、方位が不正確に表現されているのである。

1979 年、地図出版社が出版した約 87000 分の一の「北京都市図」⁽³⁵⁾は、北京中心部中軸線も含む全ての街路が正南北の方向に描かれており、北の方位表示はない。

1984 年、北京歴史地理研究の泰斗である侯仁之が作成した 5 万分の 1 の「北京市城区」⁽³⁶⁾都市図は、北京中心部の街路や重要建造物を詳細に表記した。北の方位表示はないが、すべての街路や中軸線の方向が角度をつけて正確に表現されている。

アメリカ在住の地理学者である謝覚民（1994）が編纂した「中国省級地図集」で収録された約 18 万分の一の北京市域地図⁽³⁷⁾では東西方向の街路の方向は正しく描かれたが、南北方向の街路及び中軸線は正南北に描かれて、実際の角度と相違している。一方、中国城市地図集編集委員会が出版した五万分の一の北京地図⁽³⁸⁾で描かれた北京の中軸線及び街路の方向は忠実に描かれ、実際の方向と同じであることが分かる。なお、21 世紀になると、北京の街路ないし中軸線の方向については、ほとんど正確に描かれている。

上述の地図の検討結果をまとめると、清代に多くの北京図が作成されているが、ほとんどの北京図は中軸線や街路の方向を実際に反映していない。そのみならず、すでに近代的製図が普及した民国期以降に描かれた北京図も、中軸線や街路の偏りに対して正確ではない。前者は中国伝統の製図方法を利用したことと関係があるかもしれないが、主題、縮尺、方位が地図三要素と強調された 20 世紀で作成した都市図としては、重要な軸線や街路が正確に表現されていないことはあり得ないだろう。それは、中軸線をはじめとする北京の街路偏りの角度は小さすぎるため無視されたと考えられる。要するに、この角度は北京における今まで百年来の磁気偏角よりも遥かに小さいことにより、この偏り問題が一般的に理解されなかったとも考えられる。

図 5 は、1910 年から 100 年間の北京中心部の磁気偏角⁽³⁹⁾を表示している。ある地点の磁気偏

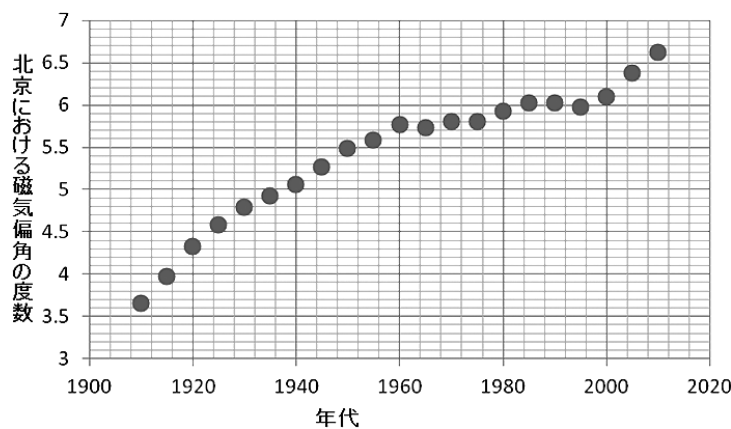


図 5 北京中心部の磁気偏角の変化
(表 1 より筆者作成)

表 1 北京中心部 (116° 40' E, 39° 22' N) の磁気偏角の数値 (1910–2010)

| 年 | 磁気偏角 | 年 | 磁気偏角 |
|------|-------|------|-------|
| 1910 | 3.651 | 1960 | 5.765 |
| 1915 | 3.975 | 1965 | 5.729 |
| 1920 | 4.326 | 1970 | 5.807 |
| 1925 | 4.579 | 1975 | 5.802 |
| 1930 | 4.788 | 1980 | 5.930 |
| 1935 | 4.926 | 1985 | 6.022 |
| 1940 | 5.059 | 1990 | 6.029 |
| 1945 | 5.267 | 1995 | 5.970 |
| 1950 | 5.488 | 2000 | 6.101 |
| 1955 | 5.580 | 2005 | 6.378 |
| 平均 | 5.419 | 2010 | 6.621 |

(京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センターのホームページを参照し作成)

角は常に変化している。表 1 からみると北京においては、100 年間の磁気偏角は 3.651 度から 6.621 度まで、基本的に逓増の勢いで変化すること、及びこの北京の中軸線ないし街路の偏りの角度はこの 100 年間磁気偏角にも及ばないことが明らかである。

地図だけではなく、多くの論文に掲載している北京の地図では、中軸線や北京城の偏りが表現されなかった。例えば、布野らが作成した北京市内区間の主題図⁽⁴⁰⁾における街路と中軸線は正南北を向いているとともに、真北を指している北のマークも描かれている。前述のように 21 世紀になると、北京の中軸線や街路の描きかたの錯誤はあまり見られない。ただし、地図の製作に精通する建築史専門家の論文においては、不正確な方位表示の要因は、北京の中軸線が偏りを持つことに気付かなかったからと思われる。前節で述べた清代における北京図と合わせて見ると、北京地図で表現された中軸線や街路の偏りは、地図の作成の時代や製図技術とは関係ないことが明らかにされた。

また、既に方位は正確な北京地図が描かれた時代より後の時代に作製した北京地図でも、偏りが表現されなかったことから、20 世紀に入っても中軸線や街路方向の表現は、時代や製図技術と関係がないことが分かる。後の時期に作成した地図であっても、前の時代にしなかったミスをしたのは、前の時代の地図をそのまま複写や直接引用をせずに、独自に製図したからではなかろうか。

V. おわりに

本稿は北京の都城構造における中軸線の起源やその偏りの問題を再検討した。北京の中軸線は元の時代に生まれた中軸線が明清時代を経て今日まで変わらずに継承されている。北京の中軸線の起点については侯仁之と郭超の二説があり、現存の史料と考古学の成果から判断しても、どちらが正かは判断できない。だが、現時点で分かる情報からみれば、元大都の中軸線の起点の中心閣は現在の鼓楼に当たるのではないかと考える。

また、北京の中軸線が反時計回りの 2.1 度の偏りを持つことが 1950 年代に発見されたにもかかわらず、注目されたのは 21 世紀以降である。中軸線の偏りを持つ原因は民族矛盾により故意に歪めて設計したとする説、上都指向説、測量技術と磁気偏角説などがあり、その中、上都指向説が現時点で最も有力の説とされている。

しかし本稿で検討したようにこれらの説には疑問があり、成立し難いことを明らかにした。筆者は北京の中軸線の偏りの原因を探究するため、元大都の一つ前の都城、上都の宮城から正南と南東 2.1 度の方向へ線を引いてみた。その結果、歴史上、多くの都城が立地した北京平野に至ると、それぞれ永定河水系の水量最も豊富な地帯と、金中都が使用した水源地蓮花池水系に到ることがわかった。永定河水系は氾濫原が広い面積を占める水が豊富であり、蓮華池水系は水不足になりやすいことから、フビライカン(元大都)は三つの新しい都の造営案のうちから、最後の積水潭水系を中心に選んだことを推定した。換言すれば、大都の中軸線は直接に上都を指すのではなく、一つ前の建都の案で計画した都市の中軸線が上都を指向していたと考える。

最後に、歴代の北京都市地図に描かれた中軸線を検討した。時代や作者によって描かれた北京図の表現方法や内容はまったく異なる。特に、北京の中軸線の偏り、つまり北京城全体の角度に関わる表現が異なる。筆者は清代から 20 世紀 90 年代までの代表的な北京図を例として比べた結果、中軸線偏りの描写の正確さは、製図年代と製図の精密さには関係がないことを推定した。中軸線偏りの角度が小さいからこそ、製図家や学者に重視されなかっただろう。

本稿は北京の中軸線、主に偏りの問題について、基本的な問題を検討した。中軸線偏りの原因に関しては、これを実証する考古学的或いは文献学的材料が乏しいことを痛感する。しかし現時点で、北京の中軸線に対する歴史地理的の考察を通して、フビライカンが建都した背景を把握し、中軸線が偏りを持つ原因を推定した。

[付記] 本稿は故・高橋誠一教授の指導のもとで開始し、現在は野間晴雄教授のもとでとりくんでいる課題の中間成果である。秋山元秀滋賀大学名誉教授には細部にわたり多大のご教示をたまわった。記してお礼申し上げます。

注

- (1) 郭超『北京中軸線変遷研究』学苑出版社, 2012, 1 頁。
- (2) 北京日報「北京中軸線偏移之謎」東方収蔵 2011-07, 2011, 121 頁。
- (3) 積山洋『古代の都城と東アジア』清文堂, 2013, 9-58 頁。
- (4) 『周礼』においては古代車、兵器、楽器などの製作、宮室造営の技術が述べられる部分。
- (5) 十三経注疏小組『十三経注疏分段標点』新文豊, 2002, 1834 頁。
- (6) 応地利明『都城の系譜』京都大学学術出版会, 2011, 70-73 頁。
- (7) 元大都の時代から積水潭湖畔に商業区が設けられた。
- (8) 前掲註(3), 42-47 頁。
- (9) 『南齊書』卷五二「列伝第三 邱巨源」中華書局, 中華書局標点本, 894 頁。
- (10) 陳子展『詩経直解』上「鄘風 定之方中」復旦大学出版社, 1983, 151-152 頁の記述によると、先秦時代に宮殿を建造する際、必ず宮室星が見える季節で実行する。さらに宮室星を参照して、宮殿の位置や方向を決定する。
- (11) 天体運動などの天文現象。
- (12) 王子林『皇家風水』紫禁城出版社, 2009, 130-135 頁。
- (13) 北京の現代都市計画用語。両軸は長安街と中軸線、両帯是北京近郊東部の「発展帯」と西部の「生態帯」、多中心は複数の副都心を指す。
- (14) 北京では金の太寧宮ないし隋の臨朔宮の時代から、中軸線はすでにあったという議論がある。しかし、筆者は王都の中軸線の計画理念は一般的軸線と違うと考える。
- (15) 前掲注(1), 393 頁。
- (16) 『析津志』の大部分がなくなり、残されているのはわずかの部分である。
- (17) 北京市中心部にあり、明清時代の城壁を撤去後建てた環状道路である。二環路以内は明清時代の北京城の敷地に相当するため、北京旧城とも呼ばれる。
- (18) 中軸線の偏りが表現される時期は、50 年代の中華人民共和国の測量より早いのは、20 世紀初めごろの日本軍による測量製図や中華民国による製図などが多数ある。僅かの偏りは都市構造にとって、大きな影響を与えないため、このことを一般民衆にずっと知らされていない。
- (19) たとえば、朝鮮半島にある都城は設計理念や手法から見れば、中華系都城の系譜に位置つけられるが、東アジア大陸部のように広い平野が多くないため、完全に周礼型都城に従う都城の例はきわめて

少ない。

- (20) 成都は四川盆地にある経済と政治の中心都市である。最初に都城となったのは劉備により建てられた蜀漢政権（221-263）の都である。唐が滅ぼされてから、王建が前蜀政権（907-925）をたて、成都を都城にした。成都城の方向は周囲の河川の方角により、南の錦江と東の綿江、北西の南家湾、西の摸底河に囲まれた四角形の内縁とはほぼ一致するため、全都城ないし主要街路の方向は時計回り方向に約29.6度の偏りがある。一方、真ん中に位置する宮城や中軸線の計画は唐の長安城を真似したため、正南北の方向に見えるが、実際反時計まわりで約1.6度の偏りを持っている。
- (21) 耿長宝「中軸線申遺：讓文化遺產在新時代閃耀」北京記事，2012-09，2012，6頁によると，ある歴史学者は民族矛盾により故意に歪めて設計したとする説と述べ，その原因は元の統治者の漢民族に対する弾圧であるとする。
- (22) 前掲注(2)，121-122頁，李建平「北京中軸線尋踪」伝承，2009-03。
- (23) 張耀南「北京城中軸線偏移的秘密究竟何在－与劉海忱，夔中羽先生商榷」走近科学，2005-03。
- (24) 『元史』卷一五七「列伝第四十四 劉秉忠」中華書局，中華書局標点本，3688頁。
- (25) 前掲注(2)，122頁。
- (26) 現在閃電河と呼ぶ。
- (27) 風水思想においては，気つまり自然のパワーが集中する場所に都を建設したら，王朝の運命がよくなると考えられた。
- (28) 杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会，2004，154頁。
- (29) この地図は内務府大臣の海望が総指揮をとり，イタリアのイエズス会修道士カスティリオーネ（朗世寧）の指導のもとで作成した現存最古にして最も詳細な北京地図とされる。原図の閲覧はほとんど不可能であるため，筆者は東洋文庫国立情報学研究所－デジタル・シルクロード・プロジェクト『東洋文庫所蔵 貴重書デジタルアーカイブのホームページに掲載されているデジタル地図 <http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/II-11-D-802/map/>（2014年5月22日閲覧）を参考にした。東洋文庫所蔵版は650分の1縮尺の原図を2600分の1縮尺に改めたものである。
- (30) イタリアのイエズス会の宣教師である。1715年に清へわたる。西洋画の技法を清へ伝え，美術や建築に影響を与えた。
- (31) 劉鎮偉『中国古地図精選』中国世界語出版社，1995，33頁。
- (32) 前掲注(9)，32頁。
- (33) 『中国大陸二万五千分の一地図集成 I』科学書院，1989，277頁。
- (34) 『近代中国都市図集成』柏書房，1986，3-6頁。
- (35) 『中華人民共和国地図集』地図出版社，1979，62頁。
- (36) 侯仁之『北京歴史地図集』北京出版社，1986，7-8頁。
- (37) Chian-min Hsieh and Jean Kan Hsieh., *CHINA, A Provincial Atlas*, Macmillan Publishing USA, 1994, p.50
- (38) 中国城市地図集編集委員会『中国城市地図集』中国地図出版社，1994，5頁。
- (39) このグラフは京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センターのホームページ <http://wdc.kugi.kyoto-u.ac.jp/igrf/point/index-j.html>（2014年4月29日閲覧）を利用し，北京の太和殿の座標（116°40′ E, 39°92′ N）の1910年から100年間の5年ごとの磁気偏角データである。
- (40) 布野修司，鄧突，重村力「乾隆京城全図（1750）にみる居住単位に関する考察」日本建築学会計画系論文集，582-2004-8，2004，65-72頁。

（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程地理学専修）